大官大寺第３次の調査

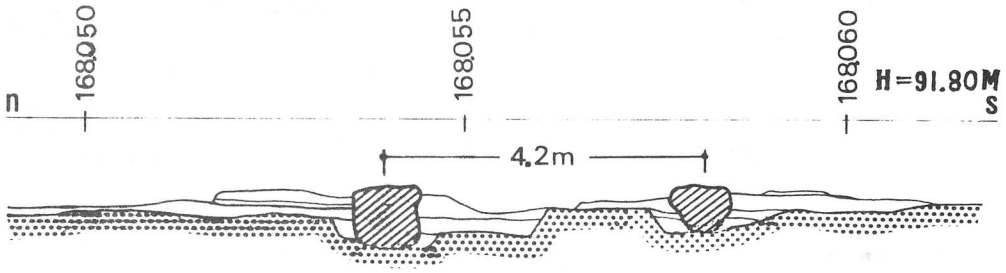
（昭和51年４月～昭和52年１月）

第３次調査は，南・東面回廊，寺域東限，中ツ道の検出，及びそれらの相互の関連の追求などを目的として実施した。検出遺構には，回廊，掘立柱建物，塀，溝，土壙などがある。

回廊は南面東回廊SC053を７間分，東面回廊SC051を４間分検出した。回廊東南隅は中門取り付き部から15間目にあたる。礎石はすべて原位置を保っており，梁行4.2ｍ（14尺），桁行各間3.9ｍ（13尺）である。脇門にあたる施設は検出されなかった。

基壇造成に際しては，掘込地業は行わず，旧地形の低い西よりでは盛土し，旧地形の高い東よりの部分は地山を削り出し，その上に数層積土している。基壇上には，軒瓦を含む瓦が落下した状態のまま検出された。そこでは後述するように，軒平瓦に対して軒丸瓦の個体数が著しく少いことが注意された。瓦を取り除くと，火災で堅くしまった基壇面に，垂木や野地板とみられる焼損材が遺存していた。基壇縁の礎石からの出は一定せず，また基壇外装や雨落溝が全くみられず，基壇造成が未完で火災にあった状況を示している。

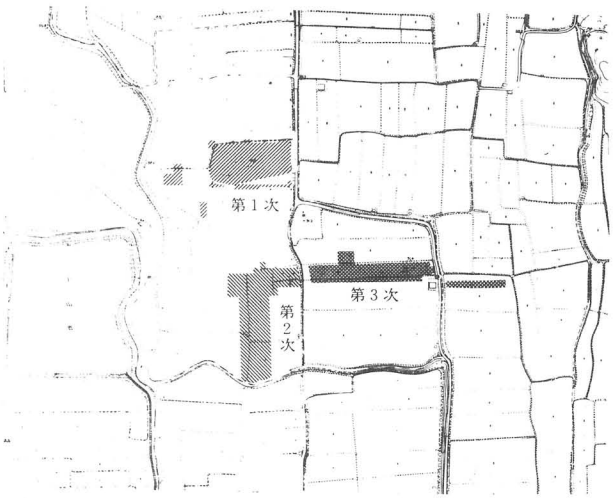
礎石の据えつけに際しては，まず，所定の位置に据えつけのための掘形を穿ち，礎石を据え，そのあとに基壇土を積土している。礎石は花崗岩で，大きさは1.3×1.0ｍほどである。表面は非常にもろくなっていて，現状では柱座などの造り出しは認められない。礎石の配列は，石の長軸をおおむね棟方向にそ



回廊土層図（168、426ライン）

ろえている。

南北溝SD260は，現状では幅1.4 m～4.0 m，深さ0.6 mほどであるが，本来は幅1 mほどの溝とみられる。溝内には手斧の削り屑など多量の木片や瓦・土器を含む。南北溝SD259，SD255はいずれも幅0.6 m，深さ0.1 mで，土器を含む。

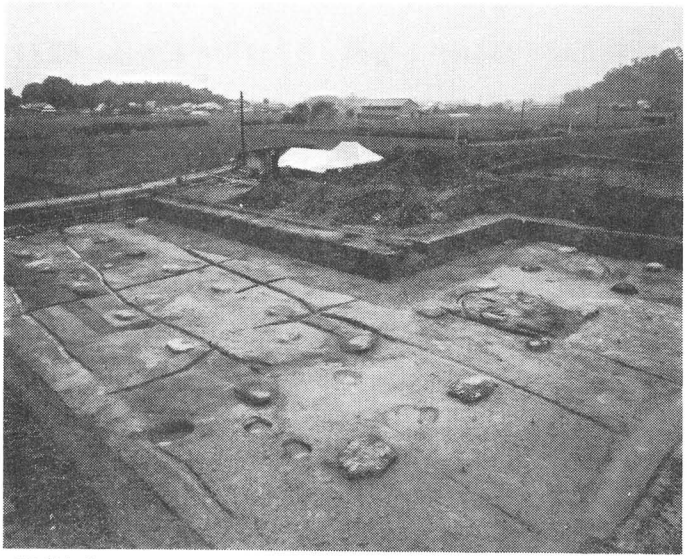


大官大寺第3次調査位置図（縮尺4000分の1）

SK253はSD255を切って存在する大きな土壙である。焼土や炭化物に混って，瓦・土器・鉄滓など多量の遺物が出土した。SK252も同様の土壙である。

南北溝SD250Aは幅13m，西の肩からの深さが0.6 mである。畿内第5様式の弥生式土器，5・6世紀の土師器・須恵器や馬歯が出土した。SD250BはSD250Aの東よりに幅5 m余りが認められる。フイゴの羽口や鉄滓とともに大官大寺式の軒平瓦（6661型式）が出土した。SD251は畿内第5様式の弥生式土器を含む自然流路である。

このほか，回廊下層で弥生時代の方形周溝墓SX270を検出した。わずかに周溝の一部を残すのみで，マウンドや墓壙は遺存していない。周溝内から畿内第5様式の弥生式土器が出土した。器種には，壺，長頸壺，甕，鉢，高杯などがある。


回廊東南隅

SD250の東側には南北に地山の高まりSX240が認め

られた。SD250の底から0.7 mの高さである。土壙SK245は4×4 mほどの長円形を呈する。東の壁は発掘区外へ出る。土壙内からは，手斧の削り屑や，土器，瓦とともに，木簡が7点出土した。釈読できる1点は次の通りである。

「讃用郡□里鐵十連」

里名の一字表記から，大宝から和銅初年にかけての年代が考えられる播磨国からの貢進物付札である。

南北溝SD244は深さ1.2 mで，溝の西肩は発掘区外に出て全幅は不明である。瓦器を含む中世溝である。溝底のレベルはSX240上面とほぼ同一である。

SD244以東には，掘立柱建物・塀・土壙・溝などがある。建物・塀には，真北に対し，東へ5°ほど振れるものと，真東西にほぼ一致するものとがある。前者はSD228・229・230で，掘形が小さく，柱間や柱筋が不揃いである。これらの建物の年代は，近接する7世紀中頃の土器を出土した土壙SK226や，南北溝SD224とほぼ同じ頃と考えられる。後者のSA231は前者にくらべて大きめの掘形を有し，掘形の切り合いによってSB229より新しいことがわかる。

出土遺物は，多種類にわたっているが，瓦・銅製品について述べよう。

瓦は回廊基壇とその周辺に膨大な量が堆積していた。回廊をはなれると，瓦の出土はほとんどみられなくなる。出土した軒瓦は，すべて「大官大寺式」である。軒丸瓦は6231Aが1個体，6231Bが4個体，6231BかCか不明のもの14個体である。軒平瓦は6661Aが3個体，6661Bが61個体，6661BかCか不明のもの3個体，小片で細別型式の不明のもの100個体を数える。

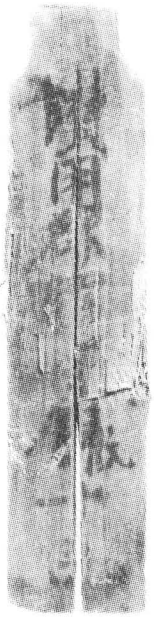
今回の調査で特徴的なことは，軒平瓦167個体に対し軒丸瓦は19個体と著しく少いことである。それでも，軒丸瓦6231BあるいはC，軒平瓦6661BあるいはCが大きな比率を示す点は第2次調査の結果と変らない。熨斗瓦について，その製作技法をみると，平瓦を焼成前に分割したうえ，さらに叩きしめを行って，曲率を減ずるという工程が加わる丁寧な作りのもので，同時代には他に類例をみない特異なものである。

銅製品には風鐸の断片がある。すべて小片で，火熱による変形が著しい。乳や舞の部分を残すものがあり，一部に鍍金の痕跡が認められる。すべて二次的

に移動した瓦堆積の中からの出土であるが，出土地点をみると，回廊の内側に出土する傾向が強く，中には塔使用のものが含まれている可能性がある。

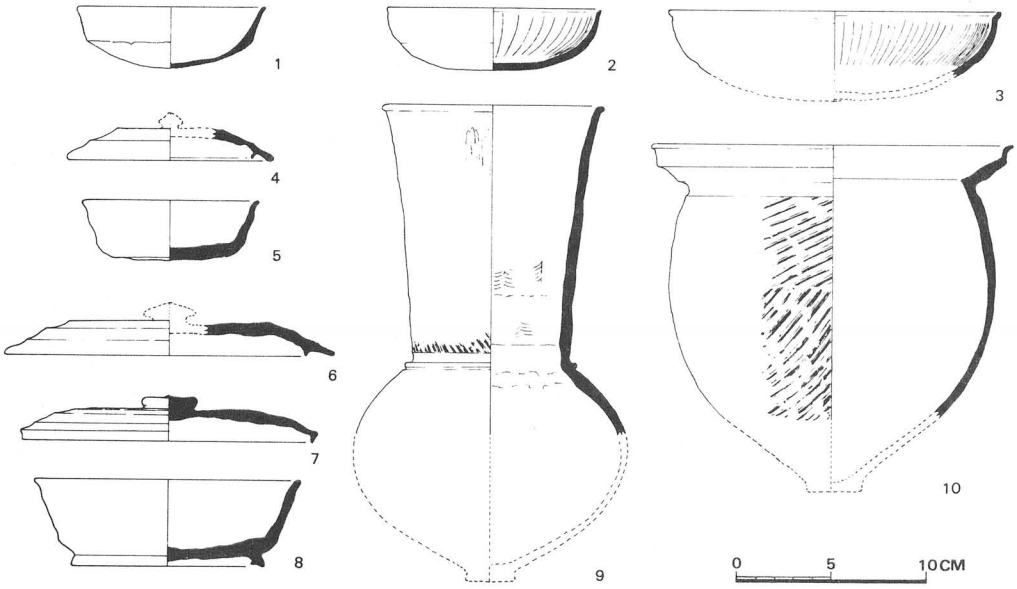
回廊東南隅を検出したことにより，回廊の全体規模の復原が可能になった。まず，中門心から回廊東南隅柱位置までは71.8 mである。これを中門心で対称に西へ折り返すと，回廊の東西総長は両端隅柱位置間で 143.6 mに復原できる。中門妻柱位置から回廊東南隅柱位置までは60 mであり，200 尺で設計がなされたと考えられる。

これまでの調査によって，南面東回廊は，ほぼ全面的に検出したことになる。南面東回廊の方位は真東西とほぼ一致し，既知の伽藍中軸線（真北に対し，北で西へ16′ 振れる。）とは，正確には直交しない。このことは，施工誤差か，造営の時期差によるものか，今後の検討を要する。



ＳＫ 245 出土木簡

回廊の方位が，少くとも南面東回廊については，真東西に極めて近いこと，



大官大寺第３次調査出土土器実測図

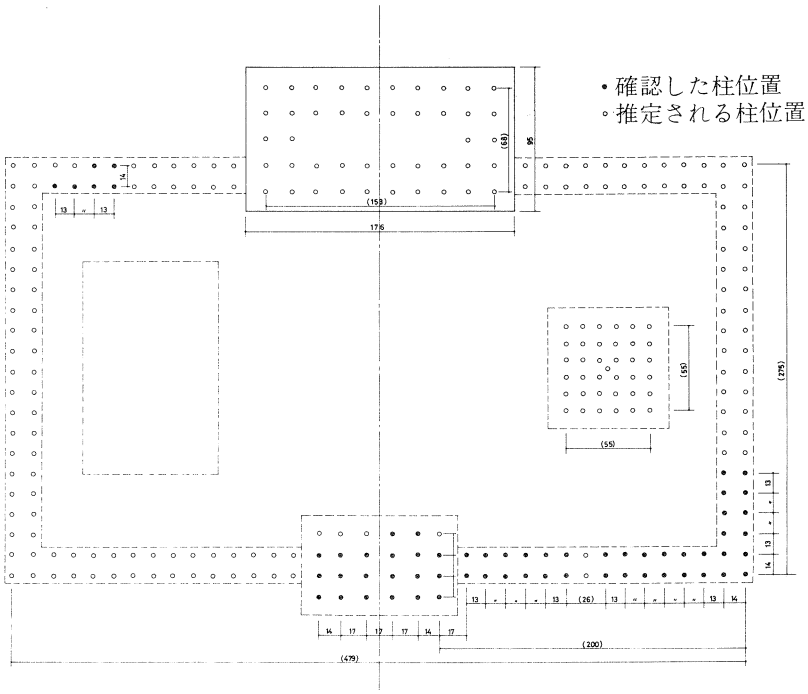
1. ＳＤ224　2.4.5. ＳＫ226　3. ＳＤ260
6. ＳＤ255　7.8. ＳＫ253　9.10. ＳＸ270

柱間寸法がよく揃い，礎石の上面高もほぼ同一レベルにあることなど，精度の高い造営の実態の一端がうかがわれる。一方，基壇造成については，掘込地業を行わず，整地面上に直接，基壇土を積むという，講堂・中門と共通した施工法によっていることも知られた。

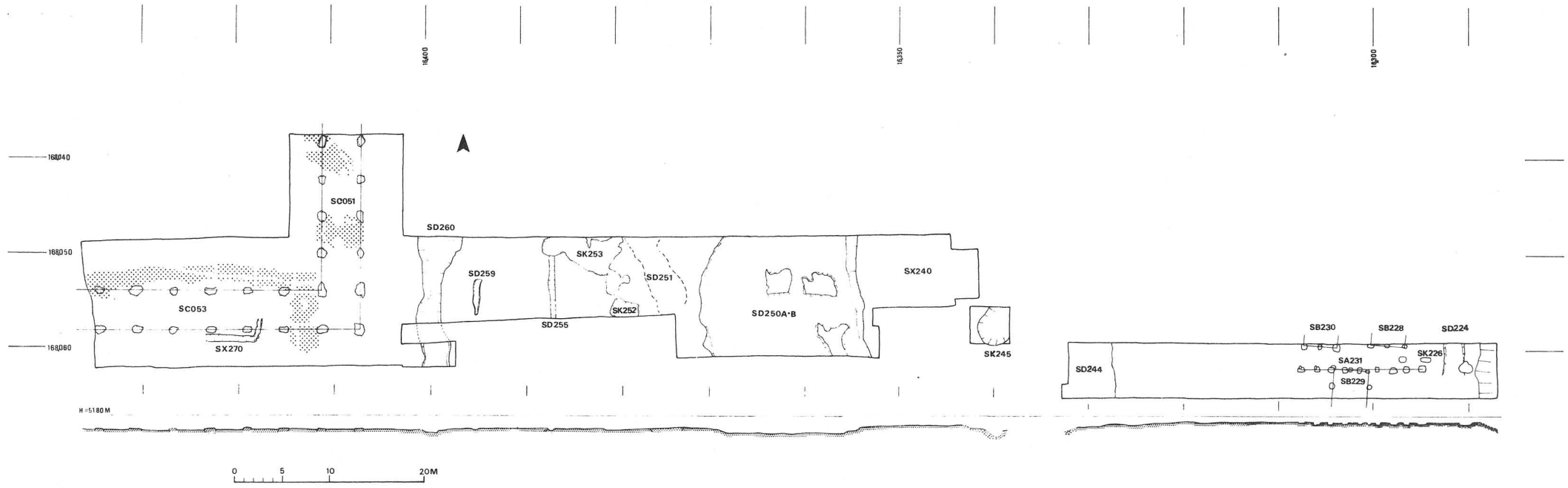
回廊の東方に寺域東限施設の存在を予想したが，調査の結果では，築地などの痕跡は認められなかった。ただ，南北溝SD255は，伽藍中軸線から91.8 mの位置にあり，この位置は講堂の西北方で検出した，寺域西限とも考えられる南北溝SD104（「概報４」参照）と伽藍中軸線との距離９２ mにほぼ一致することが注目される。ただし，いずれも検出遺構は小範囲にとどまり，寺域の区画施設については今後の調査に待たねばならない。

SD255・SD260などは，回廊に近い位置にあることや，鉄関係の木簡，フイゴの羽口，鉄滓，手斧の削り屑などの出土遺物によって，大官大寺造営に関連する一連の遺構とみることができる。

SX240については，現在，横大路以北までその痕跡がたどられている「中ツ道」の南延長線上にほぼ位置することが注目される。ただし，発掘範囲が狭く，その性格については即断を避けたい。また，中ツ道を利用して設定されたとされる藤原京東京極との関連についても今後の調査の進展に待つところが大きい。



大官大寺伽藍復原図



大官大寺第３次調査遺構実測図